

**共生社会の実現に向けた障がい者の生涯学習支援事業  
第2回コンソーシアム 会議概要**

**1 日 時** 令和8年8月3日（水）13：15～16：00

**2 場 所** アピオあおもり 大研修室1

**3 出席者**

**（1）構成員（敬称略）**

弘前大学教職大学院教授 柿崎 朗  
青森明の星短期大学准教授 棟方 梢  
青森県公民館連絡協議会会長 高森 紀之  
むつ市社会教育委員、障害福祉サービス事業所工房「歩み」施設長 清川 励  
社会福祉法人青森県社会福祉協議会事務局次長兼地域福祉課長 葛西 勇樹  
青森県障害者就業・生活支援センター連絡協議会会長 三浦 秀仁  
社会福祉法人楽晴会相談支援専門員 吉田 博之  
八戸市手をつなぐ育成会事務局 田名部 由香  
（オブザーバー）青森県特別支援学校校長会 西里 俊文  
（オブザーバー）県教育庁学校教育課特別支援教育推進室 熊谷 洋治  
（オブザーバー）県総合社会教育センター社会教育主事 橋本 政孝

**（2）事務局**

生涯学習課長 清川 喜之  
生涯学習課学校地域連携推進監・課長代理 三浦 博明  
生涯学習課企画振興グループマネージャー 三上 崇裕 他2名

**4 概要**

**（1）第1回の振り返り**

事務局から、第1回コンソーシアムで挙げられた課題について共有があった。

**（2）協議**

「障がい者が学べる場を創出するため、それぞれの立場でできること」について、3つの課題に沿って協議が行われた。

**●生涯学習情報の収集および発信の方法について**

- ①情報を伝える際は、難しい言葉を避け、イラストを多くしたりスマートフォンに（LINE等）直接情報を届けたりする工夫が必要である。
- ②チラシを配るだけでなく、動画で会場の雰囲気伝えたり、直接説明する機会を作ったりすることで、参加する人の不安を減らすことができる。
- ③活動に参加しやすくするため、決まった中継地点（駅など）まで送迎バスを出すなど、無理のない移動のサポートも考えられる。

- ④「防災」など、誰もが関心を持つテーマをきっかけにすると、いろいろな立場の人が集まりやすくなる。
- ⑤保護者や支援者を通じた口コミも大切な情報の伝達手段であり、また、パソコンを活用したオンラインでの学びなど、学習のやり方そのものを新しくしていくことも大切である。

### ●活動を支える人財（ボランティアや指導者）の確保や育成

- ①目的がはっきりしている活動には人が集まりやすいため、何を目標にするかを分かりやすく伝えることが大切である。
- ②学校を応援する地域の仕組み（コミュニティ・スクールなど）をヒントにすることで、色々な人が関わる協力体制を作ることができる。
- ③「ボランティア」という言葉にこだわらず、地域のカメラマンやお店の人など、得意なことを活かして協力してくれる「サポーター」を見出すことも有効である。
- ④高校生が社会と繋がる体験として、ボランティア活動を将来に活かす流れが考えられる。
- ⑤スポーツなどを教える人は、競技の技術だけでなく、障がいについて理解し、一緒に楽しむ気持ちを持つことが重要である。
- ⑥先生などの運営に関わる人がルールややり方を学び、異動した先でその知識を広めていくことで、協力者の輪を大きくすることができる。

### ●活動場所の確保と継続した学びの場を提供する方法について

- ①施設を利用するときは、多目的トイレや着替えの場所など、どのような設備や配慮が必要かを事前に確認しておくことが大切である。
- ②休日でも学校の体育館を使いやすくするために、防犯の仕組みを工夫したり、福祉団体の施設予約を早めに行えるようにしたりするなどの対応が求められる。
- ③お知らせのチラシにサポート内容（例：「手話通訳あり」、「どんなサポートがあるか」）を具体的に書くことで、参加する人が安心できる。
- ④参加した人の良いところを見つけて褒めるなど、「また次も参加したい」と思える楽しい経験を重ねることが、学びを続けることにつながる。
- ⑤新しいイベントを無理に行うのではなく、参加する人も主催する人も長く続けられるペースや仕組みを作ることが重要である。
- ⑥手帳を持っていなくても、生活に難しさを感じている人たちも参加できる環境を整えていく必要がある。

### （３）各事業の進捗状況、次回の検討内容及び今後のスケジュールについて

事務局から各事業の進捗状況、次回の日時、内容、今後のスケジュールについて説明があった。